

平成12年度 最上川水系流域委員会置賜地区小委員会 (第3回) の議事概要

1. 開催日時

平成12年11月17日(金) 14:00~16:00

2. 場 所

南陽市民会館

3. 出席者(8名)

委 員:前川座長、奥山委員、菊地委員、黒澤委員、齋藤(吾一)委員
佐藤委員、関谷委員、星委員

地 建:山形工事事務所河川副所長、長井ダム工事事務所長、
最上川ダム統合管理事務所長

山形県:米沢建設事務所河川砂防課長

4. 議 題

- (1)最上川水系流域委員会の報告
- (2)最上川の地域に対する役割、流域住民との関わりについて
- (3)その他

5. 記者発表等

平成12年11月9日(木)山形県庁記者クラブ(16社)、専門紙(4社)に
小委員会開催 投げ込み

平成12年11月17日(金)小委員会取材 米沢ケーブルテレビ

6. 審議結果

- (1)流域委員会の報告

「河川整備計画の目標と基本的な考え方」の説明と、最上川水系流域及び地区別
小委員会の経過

○資料について、国や県の考え方は分かったが、住民が何をすべきなのかが見えてこない。

A:工事段階においては、いかに住民参加ができるかという配慮で説明会をしています。今後も努めていきたいと考えております。

○この委員会でも傍聴席があり、住民参加に取り組んでいる。今後の取り組みにより、住民による地域の意志の決め方が議論されてくることを期待する。

○今までの経過や、これから考え方について、各市町村の自治体関係者に徹底して説明しているのか。

A: 各自治体に説明を行っております。今後は、地元の方にも公聴会を開くので、そういう面も含めて市町村と話し合いをしております。

○河川行政と森林行政とが別個に動き問題となつたこともあるので(例:ハナカジカ生息地域の工事)、管理の連携について十分配慮して欲しい。

A: 了解しました。

○最上川については河川敷も広く堤防もゆるやかな傾斜で水辺に降りていけるが、支流になると上流部まで垂直に積み重なったコンクリート工法で出来上がっているところがある。カモシカは降りると上がって行けなくなるし、人は水辺に降りていけない。それらの護岸を全部自然的な工法に戻すのは不可能に近いので例えば何百mに1箇所ぐらい緩やかな箇所を作つて欲しい。また、部分的な公園だけではなく、川全体に住民が関われる整備にして欲しい。

○小動物が降りて行って上がってこれない等の問題があり、いろいろ改良されてきている。だが、あまり身近ではなく、部分的である。水辺とつながるような見直しをして欲しい。河川でも山でも生き物に対する関わり方について進めてはいるが実態は大分遅れているかもしれない。

A: 当時は経済的、効率的にいかに早く用地費も安く工事費も妥当な額で、治水効果が上げられるかが従前の目標であり、その当時は洪水が消えて良かった、農地が減らずにすんだと喜ばれていました。時代も変わり、環境のことを考えた整備が必要だと考えております。また、いろいろな条件も考慮し、予算も考え検討していく所存です。

○保安林は、非常に大事にしなければならないという感覚があるが、一部では簡単に解除して工事のために伐る場合もある。川と保安林という問題は重要な問題であるので行政間で密接に協議しながら計画を立てて欲しい。

○渇水対策について。河川ごとに流量を定めているが、渇水時期はいつも魚のことが後回しに考えられてしまう。平時・渇水時期とも同量の水を流して欲しい。上流の水辺資源の確保のためには森林の保全が必要である。やはり上流から水資源を確保しなければ、ダムがあっても渇水対策にならない。将来に向けて水資源が枯渇しないようにして欲しい。

(2) 最上川の地域に対する役割、流域住民との関わりについて

自然、歴史、風土、文化を踏まえ、村山地区における最上川の特徴について意見交換を行った。

- 最上川の上流部には、どうしても支川本位、支川優位の考え方があり、最上川に対する意識が直接関係なくなってきたいるかもしれない。流域住民と一体となった川づくりをするには、最上川をもっと見て触れてもらうことが一番大事になってくる。スポット的な親水施設も良いが、本川沿いに白鷹～米沢の方まで散策路を整備しながら線的・面的な触れ合いを大切に出来ると良い。また、水に触れること同時に景観が非常に大切になる。川沿いの散策路の所々に景観の案内板を設置するとよい。川から山などの景観を見てもうための施設を整えると、自然に触れやすくなる。
- 生活して一番大切なものは何かという世論調査では水の良い所というのが皆の声になっている。自然の中で一番大切なものが水だということを徹底的に子供・家庭から教えるべきだ。そうすると母なる川の考え方も連想でき、自然の大切さ、水の大切さを通じていろいろなことを勉強できるのではないか。
- 水を涵養する山、森林と川との兼ね合いについて、一体感を持ち行政レベルで押し進めていく必要がある。里山を伐採する場合、機械を搬出するための道路を作るが、そのため大雨の時には川に土砂が流れ、山そのものが破壊される。明らかに修復不可能な状態になる。農林業と建設行政、日常的に一体的なとらえ方をして連携をとりながら問題点を最小限度に押さえ込むという行政指導をやるべき。置賜地方は最上川の上流部に位置するため、中下流の住民以上にきめ細かな神経を使いながら生産活動や生活を営むことが大切。また、夏場何日か行われる農薬の空中散布についてもやめてもらいたい。環境保全型農業というものを、地域全体に広めて定着させることで水質・浄化の保全が達成出来ると思っている。その辺の兼ね合いを重要視していただきたい。
- 自然の豊かさというのは、場所によっていろいろ違いがある。本当の意味の豊かさから見ると、現在行われている河川工事で生態系が守られているのか疑問を感じる。魚が住み、河川敷にはいろいろな動物が繁殖して生息するような自然でなければ、本当に豊かな河川とは言えない。実際、工事が終わった後を見ると自然の川原・ヨシ原などがどんどん減っている。それに従い、鳥もどんどん圧迫を受ける。ある面で水質が良くなつたため、魚の個体数が回復しており、それをエサとする鳥は増えるなど種によって違いが出来ている。見た目では鳥が増えたような気になるが絶滅の危機に瀕する鳥の中にはいる。絶滅の危機に瀕する鳥というのは、特徴的な生息場所を持つ。生息できるようきめ細かな配慮をした工事が必要であろう。本当の意味の豊かな自然を持った川づくりと、それから新しく文化が育ち、また古い良い文化が守れるようなそういう川づくりを地域住民でするべきである。川は水質が良くなければいけない。資料を見ると、本当の意味で水質を良くしていく具体的取り組み方があまり感じられない。行政も住民も一緒になって水質を良くすることを本気で考えていく必要がある。

- 水質を良くすることについて、下水道工事が行政で行われているが、家庭では個人的

なお金がかかることもあり、下水道が完成してもすぐ直結する家庭はなかなか少ない。住民がもっと感じるよう水質を良くするための努力についての勉強会が必要だと思う。

○水質面で言うと、私達がこの母なる川、最上川の水質を悪くしたんだという反省がある。川や動物を考え多自然型にするのは良いのだが、中に足を踏み入れる手段がないというのではあまりにもひど過ぎはしないだろうか。子供の頃から川に親しみ、水・環境の大切さを教えるべきだと思う。源流を訪ねたり、シンポジウム、探索会などの催しを四季を通して開催し、水質・川を理解する人たちの醸成、またそういう人たちを増やしていくよう21世紀に取り組むべきではないか。最近の洪水の例を見ると消防団等にまかせ、家から一歩も出ないという傾向がある。しかし、昔は地域に降った雨だからということでも防いだ経過がある。これも川・水に対する関心の薄れからなのではないかという危機感を持っている。

○堰に入った水が田圃等を経て川に入る。そこで、川に入る前に1箇所に集め浄化してから流すという環境整備が出来ないだろうか。飯豊町の農家で田圃に水を張っていたら白鳥や小動物・アシなどの影響で浄化されたという話がある。また、水を留めておくと水を抜きさえすればすぐ田圃になるという便利さがある。農林水産省と考え、河川環境とタイアップした水の浄化方法をしていただきたい。

○ハヨ(ウグイ)を瀬で捕り、川べりで塩焼きにして食べる催しものがあるが、川の上流に産業廃棄物の処理場が立地されないと食べる時少々気になる。河川行政で、ダイオキシン・環境ホルモン等排出される疑いはないか確かめて欲しい。また、本当に安心して川に親しむために、最上川の水質をさらにレベルを高め、行政と住民が一体となった取り組みが必要である。川全体を目につめるためのウォーキングコース・サイクリングコースなどで、子供や大人を含めて環境整備に向いていくようにして欲しい。川全体に対する関心を深め自分が何をやらなければいけないのかと足元を見直してくるのではないかと思う。

○農業水田地帯からの排水の浄化という話があった。下流へも非常にいい効果を出すのではないかと思うので是非お願いたい。川の河床を見てみると、周りの地層の性質により、底に砂や泥が入ってきている。自浄作用が出来るだけ進むような方策が望ましい。また農家の方々と一緒にやらないと絶対出来ないので日常生活の中で市民と川が本当に生活の一部になって関わりあえるような施策を進めて欲しい。それが川づくりにつながる。

○昔は川の中に大きい石がたくさんあり、そこに水がぶつかり白いしぶきを上げ、水を浄化しながら進んでいた。ところが、今は設計上平らになっているからということで、大きい石は埋め戻してなだらかな川づくりをしている。そのためにヘドロが溜まり、魚の隠れ家も無くなることになる。

A:最上川本川ではなく支川の話かと思いますが、工事の仕様、洪水の疎通を速やかにという考え方から今まで整備してきました。これからは、淀みや、瀬、市街地、山手など場所を考え、また従来の機能を活かしながら川づくりをしていく方向になっています。工事の管理の仕方についても一緒に研究の必要があると思っています。

○置賜地区の最上川は下流ほど大きくはないので、生物や生活と直接的に関わる所。上流できちんとしていけば下流へも繋がっていくだろう。